

チーム医療における臨床検査技師とは

◎木下 真紀¹⁾、下村 大樹¹⁾、嶋田 昌司¹⁾、上岡 樹生¹⁾
公益財団法人 天理よろづ相談所病院¹⁾

当院では、臨床検査技師がさまざまな診療分野のチームに参画している。今回、我々が参画しているチーム医療ならびに臨床検査技師の役割について報告する。

【各チームにおける活動】①NST：栄養不良患者の抽出と病態に合わせた栄養投与ルートやメニューの提案、検査データの監視。PFD 試験、D-キシロース吸収試験、 $\alpha 1$ アンチトリプシンクリアランス、便脂肪定量などの機能吸収試験の提案と実施。②DMT：SMBG 器の指導および修理点検、糖尿病教室での講義、糖尿病腎症 2 期患者への検査説明、FGM・CGM の指導、新機種導入時の機器選定と評価。

③ICT：感染管理が必要な患者の抽出と対応、Covid-19 発生時には患者対応の整備および検査室内での検査体制を構築。④心臓リハビリテーション：心肺運動負荷試験の説明と実施（実施負荷量の決定）、心臓病教室での講義。

⑤irAE 監視チーム：免疫チェックポイント阻害薬使用患者の副腎皮質機能不全発症を早期に発見するシステムを構築、運用。⑥がんゲノム医療：遺伝子検査のコーディネート、患者および家族への説明。

【考察】現在参画しているチームの多くは発足時から関わり、臨床検査技師の視点で患者の病態を解析し、患者に必要なサポートの提案や検査説明などを実施している。さらに、チームにおける役割は、患者サポートにとどまらず、システマティックな論考を活かしたチーム運営の提案、職種間の橋渡し役など、チームに欠かせない存在となっている。チーム医療で培った知識と経験は、病態解析力アップに繋がるだけでなく、多角的な視点や柔軟な思考、コミュニケーション力を培うことができる。それらは日常業務だけでなく検査部運営にも活かされている。チームで必要とされるには、情報収集を怠らず必要であれば実験し、その結果を論理的にどの職種にも理解できるような資料を作成し報告すること、また新しい知識や技術習得に怠らず、日進月歩進化する医療とともに我々も歩み続けることである。今後、臨床検査技師の職域がより検査室外に広がる中、多方面で活躍できる技師を育成するためにも、積極的にチーム医療へ参画していきたい。

連絡先：0743（63）5611

法的脳死判定を経験して

◎塩山 愛加里¹⁾、黒田 舞子¹⁾、榎木 雄美子¹⁾、清水 楓梨¹⁾、吉田 元治¹⁾
大阪府立中河内救命救急センター¹⁾

【はじめに】当施設は、大阪府東大阪市にある独立型の三次救命救急センターで、主に現場からの救急搬送例と医療機関から紹介される症例に対応しており、命に係わる重症傷病者を専門的に治療する医療施設である。外因・内因性を問わず大脳虚血を呈した症例も多く搬送され、必要時には法的脳死判定を行っている。今回、入職後初めて法的脳死判定を経験したので気づいた点や感じた事柄を報告する。

【症例】39歳男性。自宅にて、いびき様呼吸を呈し意識障害が認められた為、救急要請され搬送となった。バイタルはGCS:1/1/1、BT:40°C、HR:173回、BP:255/155mmHg、RR:17回、瞳孔:5/2mm、対光反射:-/+であった。搬入後のCT検査において脳幹出血の診断となった。

【経過】搬入から10時間経過後、両側の瞳孔散大と自発呼吸の消失を認めた。PrePotential判定として①深昏睡②瞳孔散大と固定③脳幹反射の消失④平坦脳波（以下、ECI）（聴性脳幹反応検査（以下：ABR）も実施）を確認した。その後、鎮痛・鎮静薬をすべて終了し、24時間経過後に再度上記4点を確認し、脳死と診断しうる状態であると判断

された。その後第一回法的脳死判定、さらに6時間後に第二回法的脳死判定を実施し、死亡確認となった。

【考察】臓器移植に関連する検査は、EEGやABRで大脳電位の平坦化や脳幹反射の消失を確認するだけであると考えていた。しかし臓器提供を見据えて全身状態や臓器がどのような状態にあるのかということを経験しなければならぬということを学んだ。例えば、臓器の状態を画像的に判断する超音波検査や無呼吸テストで必須である血液ガス検査、その他にも生化学・血液検査や免疫学的検査など様々な検査に対応する必要がある。そのためには、日々の業務を目的をもって大切に実施する必要があると考えた。

【まとめ】法的脳死判定に携わらせていただいた。我々臨床検査技師が実施する各種検査が命に直結しているということを改めて強く感じる経験となった。これは、法的脳死判定に関わる検査に限らず、日々の様々な検査でも同じことが言えるということ意識して、これからも邁進していきたいと考える。連絡先 06-6785-6166

「臨床検査技師 AtoZ」を用いた広報活動について（報告）

©滝本 寿史¹⁾、小畑 義規²⁾、園田 真之³⁾、白波瀬 浩幸⁴⁾

公益財団法人綾部市医療公社 綾部市立病院¹⁾、国家公務員共済組合連合会 舞鶴共済病院²⁾、公益財団法人 丹後中央病院³⁾、株式会社 KBBM⁴⁾

【はじめに】「臨床検査技師 AtoZ」（以下、AtoZ）は A から Z まで 26 個のキーワードで臨床検査技師を解説したミニブックで、京臨技北部研究班が企画制作した。今回、AtoZ 制作後の経過について報告する。

【目的】AtoZ を読んでもらうことで、臨床検査技師の仕事を市民や学生に広く知ってもらう。また、京臨技会員のコミュニケーションツールとして、名刺がわりに活用してもらう。

【方法】①京臨技会員に周知し、配布する。②病院施設や図書館などで配布する。③新聞社に取材を依頼する。④臨床検査専門誌に掲載を依頼する。⑤ポスター展示を企画する。⑥イベントや学生向けの職業紹介で配布する。⑦インターネットでアンケートを募集する。

【結果および活動報告】①「京臨技ニュースレター」に同封し、配布した。②病院施設や保健センター、図書館などで配布してもらった。③「あやべ市民新聞」の取材を受け、紙面に掲載された。④「月刊メディカル・テクノロジー」で紹介された。⑤福知山市立図書館でポスター展示を行っ

た。京都新聞の取材を受け、紙面に掲載された。⑥検査と健康展などのイベントや病院施設のコメディカル体験などで配布した。

【考察】アンケートでは 21 件の意見が寄せられた。

「AtoZ をご覧になって臨床検査技師の仕事がわかりましたか」の問いに、90.5%が「わかった」と回答があった。「臨床検査技師の仕事に興味をもたれましたか」の問いには、85.7%が「興味をもった」と回答があった。新型コロナウイルス感染症の影響で各種イベントが中止になり、AtoZ を直接に配布する機会がなかった。そんな中でも、新聞掲載やポスター展示で、多くの市民に臨床検査技師を知ってもらうきっかけができた。京都府北部地域では十分に活動できたが、この活動を京都府全域に広げることが今後の課題である。

【結語】AtoZ を用いることでコロナ渦においても地道な広報活動が実施できた。これからも、AtoZ を有効に活用して、臨床検査技師の仕事を伝えていきたい。

（連絡先：0773-43-0123）

第 62 回日臨技近畿支部医学検査学会 広告協賛企業

- アークレイマーケティング株式会社
- アボットジャパン合同会社
- H. U. フロンティア株式会社
- オーソ・クリニカル・ダイアグノスティクス株式会社
- 株式会社アイディエス
- 株式会社カイノス
- 株式会社 ビー・エム・エル
- 鎌田理化医療器株式会社
- 極東製薬工業株式会社
- 株式会社 三和化学研究所
- 株式会社シノテスト
- 株式会社フィリップス・ジャパン
- シーメンスヘルスケア・ダイアグノスティクス株式会社
- シスメックス株式会社
- 島津ダイアグノスティクス株式会社
- 株式会社セロテック
- セラビジョン・ジャパン株式会社
- セイコーメディカル株式会社
- 竹内化学株式会社
- 株式会社 大黒
- デンカ株式会社
- 東ソー株式会社
- ニッターポーメディカル株式会社
- 株式会社 日立ハイテック
- バイオメリュー・ジャパン株式会社
- 富士フイルム和光純薬株式会社
- フクダ電子近畿販売株式会社
- ブリストル・マイヤーズスクイブ株式会社
- ベックマン・コールター株式会社
- 松浪硝子工業 株式会社
- ミナリスメディカル株式会社
- メルク株式会社
- ラジオメーター株式会社